

全学にまたがる委員会

永田 豊 (地球惑星物理学専攻)



助手に採用されて以来、33年近くも理学部で働いてきたとは、自分ながらに感心させられるが、停年退官といっても特に感慨も湧かないのは感覚が鈍いせいなのだろう。定員削減の進行のなかでの人事委員会というお通夜よりも陰気な委員会委員を何度か勤めたり、ポロで定評のある3号館の委員・委員長を長期にやらされたり、入試委員その他少しは理学部や教室のお役に立ったのではないかと考えるが、これらはあまり楽しい思い出とは言えそうもない。ここ何年か、やめて行かれる先生方が大学紛争の時の苦労話をされる例が結構あったように思うが、私は好運にも紛争時はカリフォルニアのスクリップス海洋研究所に滞在していて、時計台の攻防はアメリカのテレビで見た。ただし、紛争で逃げだしたのではなく、向こうへ行ってから紛争が始まった。当時は講師であったが、紛争途中で講師も教授会の正式メンバーに成ったから早く帰れという連絡が上司の教授から来た。しかし、紛争が始まった後から責任をもたされるのは、ちょっと論理が通らない様な気がして「私のようなのが帰ったら紛争がより大きくなるのでは」と返事をしたら、それきりになってしまった。

ただし、帰国したらすぐ、全学の学生委員をや

れと当時の植村学部長から命ぜられてしまった。直接の敗因は、植物園での園遊会へ向かって歩いていて部長の車に拾われたのがきっかけで、あくる日に電話が掛かってきた。しかし、紛争中にいなかった奴にやらそうという意図があったのではないかと今でも勘ぐっている。「今あまり問題もないでしょうから」と言われたものの、5月祭で「橋の無い川」の上映問題とやらで徹夜騒ぎが何度かあった。学部にもたがるこのような委員会では、結構新しい知識がえられる。法学部には2種類の人間が住んでいて、頭に法がつく法哲学・法社会学・法情報学等に、尻に法がつく民法・刑法等と、それぞれを専攻している人間の間で、考え方に理学部と工学部以上の差があることを知ったのもこの時である。自己紹介で「ものの役に立たない理学部から来ました」と言ったら、皆がそうだろうなという顔をして、最初は楽をさせてもらった。会議が夜11時半を回った所で、「わあ、終電車がなくなる」と騒いだら、委員長がしばらくたって「20分間休憩にしましょう。その間に永田さんを車でお茶の水駅まで送ってきます」と言われたのには痛み入った。その次の時は全員終電車に間に合わなくなり、学生部がハイヤーを出してくれた。味を占めて更にその次「ああ、この調子なら今夜もハイヤーで帰れる」とはしゃいだら、他の委員が頭にきたのか早々に結論が出た。やればやれるのである。

委員会としては禁止したのであるが、学生側の5月祭委員会が強行上映を決めたということで急遽会議が召集された。すったもんだの議論があったらしいが、遅れて行った私が他人事のように「何を議論しているのですか」と聞いたら、「学生に対して大いに怒るべきだ」という結論がでたが、こ

う言えばこう言って来るだろうし、ああ言えばああ言うて来るだろうし、対策に苦慮している」という。「怒っているなら怒っていると言えば良い。理由？ そんなものはいらぬ。聞いてきたら、おまえ達、胸に手をあててよく考えてみろって言えば良い」と無責任に発言したら、驚くべき事に即座に採用されてしまった。何でも学生側から後で相当譲歩した案が出てきたとかである。理学部からの委員も役に立つ事があるらしい。最も、東大の学生委員会は他の大学と違い学生の処分権を持たず、単に大学本部と学生側の委員会のインターフェイスを果たすものであるから、正確には学生の喧嘩相手ではない。したがって、インターフェイスを怒らせるのは無意味で、得策ではないことを学生側もよく心得ていた。

最も面白かったのは法学部からの委員が、学生の中央委員会議長なるものを徹底的に論破して追いついた時のことである。周りの委員が感心して、「今の論法を学内広報に載せましょうよ」と言ったら、この先生非常に慌てて「それだけは勘弁して下さい。あれはあの法学部の学生がいたらぬせいで、今日私が使った論法は私自身だったら簡単に破れる」と言われた。確かこの先生の専門は頭に法が付いていたはずである。一度この先生が何だったか法律論をぶちだした時、なんとなく納得がいかなかったので、「ちょっと待って下さい。その法律、もしも人類の総数が10人以下に減ったら、適用できないのでは」と質問したら、うーんと考え込んで「永田さん、あんたは充分法学で食える」と言う返事が帰ってきた。横で聞いていた文学部からの委員長が「いや、文学部でも食える。永田さんの“てにをは”の使い方がしっかりしている」と対抗したのは光栄と言うべきか。さて、5月祭当日、強行上映された会場に様子を見に行ったが、一緒に行った工学部からの委員が受付で「君、大丈夫かい。保証するかね」と念をおしてから、切符を買って入ってしまった。薬学部氏が「どうしましょう」と言うので、「入っても良いけど、万一学生委員会委員が3人

も雁首をそろえてどこかのグループに捕まったら格好がつかぬ。帰りましょう」と答えたら、ほっとした顔をされた。大きな紛争が起きた時の学生委員会の委員長は工学部に限るという説がある。原理・思想等に関係なく物事に対処する能力は他では得難いのだそう。もちろん、これは褒め言葉である。だから工学部の先生は捕まってもなんとかするだろうと思っただけである。各学部からの委員は、様子をそれぞれの学部長と事務長に報告してきますとあって、待機場所から時々抜け出していた。そういえば、私は何ヵ月も部長に報告していない。まづいかなと思って、理学部本部に行ってみたのであるが、閑散としていて部長・事務長はおろか誰もいなかった。こういう所が理学部の良い所である。部長を煩わすような問題がなかったせいもあるが、ついに一度も報告には伺わなかったと記憶している。

全学にまたがる問題にかかわったものとしては、これより前に助手になりたてで東大職員組合の書記長をやられたことがある。この時の委員長は教育学部の教授であったが、「私は国際問題と国内問題があれば、国際問題を優先します」と最初に宣言された。東職の問題など国内問題の最たるものである。ために、大いに苦勞させられた。さらに、この時出身の理学部職員組合が先鋭的で、ことごとにつるし上げられたが、このような組織のいいところは、種々の階層の知合いが出来ることである。

この他にも、理学部事務の野球部を引っ張り出して、大川橋蔵劇団の連中と1年1回の早朝野球の定期戦をしばらく連続で開いて、野球好きの定評を得たこともある。しかし、退官にあたってということなので、より若い先生方にたいしてのアドバイスとして、学生委員会委員の経験を中心にした。全学にまたがる委員会の委員になるのは、大変ではあるが、決して悪いことではないことをお伝えしたかった。問題がこじれる程互いに親しくなれ、対処の仕方によっては非常に楽しいものになる。もちろん、こんな事は停年になって、も

う絶対にやらなくていい立場になったから言える ことではあるけれども。